

## 校名：香川大学教育学部附属坂出中学校

所在地：〒762-0037 香川県坂出市青葉町 1 番 7 号 電話番号：0877-46-2695

記載日：平成28年 5月16日 記載者：小林 理昭 記載者役職：副校長

### 貴校の校風、おおまかな特色について：

本校は昭和22年に香川師範学校女子部附属中学校として創設された。その後、一貫して生徒の個性に対応することに着目し、先進的な研究開発を重ねてきた。特に昭和50年代の「モジュール学習」の研究では一世を風靡し、全国的な注目を集めた。その後も、後の総合学習の原型ともいえる「合科型自由学習」の研究や、小中一貫教育の先駆たる「5-4制」の研究など、常に国の教育施策の先を見据えて研究を行ってきた。

個々の職員の研究意欲も旺盛で、積極的に外部発信を行っている。最近でも「東レ科学賞」の文部科学大臣賞受賞や、「ちゅうでん教育大賞」受賞など、めざましい成果をあげている。研究の成果を集積し、個人的に著作を出版した職員もいる。

生徒は、幼稚園からの完全連絡進学のためか、全体に穏やかでおっとりとしている。スローガンは「自由と規律」であり、生徒会活動等を通して全校生徒に浸透していると感じる。

本校と、隣接する附属幼稚園・附属坂出小学校および市内にある附属特別支援学校の4校園をあわせて「附属坂出学園」と称し、年度当初の連絡協議会や9月の合同運動会を始め、あらゆる面で一体となって活動している。

### 貴校の卒業生の活躍状況について：

① 追跡調査をしているかどうか、また、その方法

追跡調査はしていない。

② どの程度、把握できているか、また、その情報はどこが持っているか（大学、学校園、その他）  
同窓会が大まかに把握している。大学、学校では把握していない。

③ 状況を具体的にお書きください

学校としては具体的にリストにしていない。10年ごとの周年記念には卒業生名簿を作成するので、同窓会ではある程度把握している。他の附属と同様、社会で活躍し、大きな実績を上げている人は多数いる。例えば、宇宙物理学の権威で、東京大学名誉教授の佐藤勝彦氏は、インフレーション理論の提唱者としてノーベル賞の候補に擬せられることも多い。

### 貴校勤務経験者の先生方が公立学校・教育委員会などへ戻られた後の活躍状況について：

① 追跡調査をしているかどうか、また、その方法

本校は、既述のとおり、附属坂出小学校、附属幼稚園、附属特別支援学校と合同で「附属坂出学園」というグループを形成している。そして過去に所属した全職員と、現役の全職員が所属する「松風会」という組織を持っている。松風会は2年に1度、総会を持ち、その際、名簿を発行する。名簿には発行年度の状況が記入されている。

② どの程度、把握できているか、また、その情報はどこが持っているか（大学、学校園、その他）  
上記の通り、「松風会」が全て把握している。「松風会」の事務局は各校園の副校長が務めてお

り、各校園ごとにOBの現状について調査し、集約している。

### ③ 状況を具体的にお書きください

学園全体として、複数名が市町教育委員会の教育長や教育委員長を務めている。また、公立学校の管理職としても多くの者が勤務している。県教育委員会事務局や市町村教育委員会、県教育センターの指導主事等でも活躍している。附属での研究をさらに深め、大学の教員となった者もいる。

魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて：

#### 1 幼・小・中・特別支援4校園合同の学園運動会

坂出にある4校園は「附属坂出学園」として緊密な関連を持っている。9月に附属坂出中学校で行われる学園運動会は、1955（昭和30）に始まる、60年の歴史を持つ伝統行事である。さらにさかのぼれば1913（大正2）年の女子師範学校と附属小学校の合同運動会に起源を持つ。

この運動会には、総勢900名近くの園児・児童・生徒が参加し、保護者の方々の参加も含めると3000人近くが集まり、盛況を呈する。各校園の子供たちや教職員が尽力するのみならず、保護者も校種の垣根を越えて、バザーや警備などの運営に協力していただいている。つまり、この運動会は附属坂出学園が総力を挙げて行う象徴的な行事である。



【中学生に手を引かれて入場する幼稚園児】

当然、運動会の種目は、各校園の学年ごとの競技・演技だけでなく、他の校園との交流にも重点が置かれる。特別支援学校と小・中学校の交流種目では、それぞれの学年で事前の交流を持ち、当日の競技に備えている。最も象徴的なのは、4校園合同の「学園リレー」である。生まれ月により4つのチームに分かれ、それぞれ幼稚園の年少組からスタートして、学年ごとにバトンをつなぎ、アンカーは中学3年男子が務める。リレーに出場しない生徒も、生まれ月によって4組に分かれて、応援合戦を繰り広げるのである。



【小学校と合同で行うグランドフィナーレ】

また、運動会の最後には、生徒独自の手で作り上げた全校ダンスの発表がある。夏休み返上で3年生を中心に創り上げたダンスは、毎年多くの感動を呼んでいる。3年生にとってはやりきった感動を得られる場であると共に、1・2年生にとっては、「次は自分たちの番だ」と、伝統を自覚する場になっている。そして最後は小学校4年生から中学校3年生までの全員による「グランドフィナーレ」で学園運動会は締めくくられる。附属坂出学園の総力を結集し、さらに伝統を継承する場が学園運動会である。

#### 2 大学出前授業（大学との連携）

附属学校であることの利点を生かし、大学と連携して、3年生にハイレベルの授業を行ってもらい、専門的な内容に対する興味・関心を高める目的で10年前から始まった事業である。香川大学

の全ての学部から1名ずつ代表の先生に来校してもらい、授業をしていただいている。

事前に校長によるガイダンスを行い、授業の意義や内容について説明する。その後、希望調査を行い、興味のある内容を受講するようにしている。



【農学部教授による出前授業「植物の不思議」】

それぞれの授業では、大学の先生方にたいへんなご準備をいただき、中学生にも分かるよう内容を精選していただいている。そのおかげで、生徒にとっては非常に意義ある活動になっており、事後のアンケート等でもよい反応が出ている。

また、この出前授業はキャリア教育の一環も兼ねている。学問の第一線で活躍する研究者の姿は、生徒にとって将来の進路を決める上での大きな力を持つ。そのため、講師依頼の段階で、できるだけ女性の比率を高めるよう努力している。平成27年度は6名中、3名が女性であった。

### 3 保護者によるキャリア教育（保護者との連携）

平成27年度より新たに始めた進路学習である。本校では様々な事情から、公立学校で行われている職場体験学習が行えていない。そこで逆に、保護者に学校に来てもらい、ご自身の仕事について解説をしていただくことにした。PTAが講師を希望する保護者を募り、1、2年生を対象に行った。具体的な職業は、建築士、医師、消防士、銀行員、社会保険労務士、配管工、港湾倉庫管理者など、非常に多岐にわたった。事前の希望調査で、生徒はこれらの中から2つの講座を受講することとした。担当する保護者は、できるだけ分かりやすく伝えようと、模型を持ち込んだり、専門の器具、用具等を準備したりして、体験型の活動まで行ったところもあった。生徒には非常に好評であった。



【消防士からロープワークを指導される生徒】

### 4 自ら課題を見つけ、主体的、協働的に学ぶ「総合学習CAN」

本校の「総合学習CAN」は、テーマの設定、探究の方法等、全てを生徒に任せた学習である。主体的に学ぶ能力は、実際に主体的に活動させなければ身に付かないと考えるからである。したがって「総合学習CAN」は「成功」「完成」を目的としていない。「失敗」「未完成」も価値ある学習だと位置づけているのである。ただし、生徒に丸投げして教師が関わらないのではない。生徒にとって価値ある学びにするための手立てが、「CAN」という名に込められている。Cは「クラスター」、Aは「アクションラーニング」、Nは「ナラティブ・アプローチ」の略である。

「クラスター」とは「小集団」のことで、探究活動は各学年1名ずつの合計3名で行われる。これは「正統的周辺参加論」を背景にしている。1年生は集団の正式の一員として迎えられ、見習い（周辺参加）



【4月、1年生にプレゼンテーションを行う様子】

である。学年が進むにつれ、次第に経験を積み、3年生では探究活動の中心人物（十全的参加）となる。教えられるのではなく、自ら学び取っていくのである。

「アクションラーニング」とは、質問会議を中心とする課題解決の方法である。課題を抱えたクラスターの1人が、他のクラスターから1名ずつ抽出された数名の生徒と会議を行う。ただし、この会議は、「解決策」や「解答」を教わるのではない。他のクラスターから来た生徒は、課題を聞いた後、「質問」のみを行う。それによって、当事者が自ら気づいたり、ヒントを得たりするのである。これも受け身ではなく、主体的、創造的、協働的に課題を解決するための手段である。

「ナラティブ・アプローチ」とは「物語り（語るという行為と、語られた物語の両方）」のことである。生徒は「CANログ」というフィールドノートを持ち、実験データや思いつき、活動内容等を全て記録していく。また、研究の節目ではこの「CANログ」を元に、活動を振り返る「CAN物語」を書く。これによって、仮に探究が「失敗」「未完成」に終わっても、それを意味づけたり、価値づけたりすることができる。

「総合学習CAN」は1月に始まる。1、2年生がそれぞれ1人で探究テーマを模索する。そしてテーマを持ち寄ることで1次編成が行われ、1、2年生1名ずつ、計2名のクラスターが誕生する。4月になり、進級してクラスターは2、3年生となる。入学してきた1年生に対してプレゼンテーションによる2次編成を行って、各学年1名、合計3名の正式なクラスターが誕生する。以後、探究活動を深めて行き、11月の文化祭での発表で、1回（1年間）のサイクルが終了する。

成功は目的としていないが、成果の外部発信は積極的に行っている。右の新聞記事は、あるクラスターが「地産地消のスイーツ」のテーマで探究した結果、地元の菓子店で正式に商品化されたことを紹介したものである。



「総合学習CAN」は8年目を迎え、本校のカリキュラムに確固として位置づけられている。

地域において、現在、貴校はどのような存在であると考えますか：

香川県には香川県中学校教育研究会という研究団体があり、教科ごとの事務局を坂出・高松の両附属が受け持っている。夏季研修会、県大会、四国大会等の企画・運営の実務は附属が一手に引き受けており、附属なしには香川県の公立学校の研究会活動は進められない。

また、本校の存在する坂出・綾歌地区の公立学校とも密接な関係を保っている。本校の研究発表会には坂出・綾歌地区の全教員が参加して研修を行う。また、公立学校の研究授業にも、附属の職員が参加し、指導や助言を行っている。

また、県教育委員会事務局や香川県教育センターにも、多くの人材を供給しており、香川県の教育にはなくてはならない存在であると自負している。

附属学校の存在意義、貴校の存在意義について：

附属学校は、恵まれた環境の中で教育を行っている。その存在意義は、公立学校での教育のパイオニアとなることだと考える。「附属でしかできない」研究なら価値はない。しかし「附属でできることが証明されたことは公立でもできる」のである。常に先端の研究を進め、教育課題解決のための具体的手段を提案し、それが有効であることを証明する。そして、それを「公立でもできる」ように広めていくのが附属の存在意義であり、本校はその実例となるべく努力している。